



明治卅七年一月十四日第三編郵
便物認可(毎月一回廿五日發行)
明治四十一年三月二十日發行

鈴

銀

號十三第



社告

本社は客月より左の通り分擔を定め候間書信の發送等は此區別に依られ度候。

石見邑智郡田所村下龜谷 銀鈴社事業部

右は社友加盟、購讀申込、廣告に關する事件を取扱ふ

石見邑智郡田所村下龜谷 銀鈴社編輯部

右は社友及び一般讀者の寄稿、新刊雜誌類の寄贈等編輯一切に關する事件を取扱ふ。

三月二十五日

銀鈴社

第參拾號

明治四十一年三月二十五日發行



鮑

月森神來

鮑は急ぐいそいそと

一行きては止まり頭あげ

日また項低れて急ぎ行く。

(一)

(二)

日は夕ま暮 雲の日
淋しき村の村はづれ
丸木橋せる細川の

畔を馳しのびかに

(戀に破れし少女子の

戀の破片を索む日の

不安の色を狂はしよ)

尺森柳來

二十一日録

開成四十一年三月

馳は急ぐいといとど

(行きては止まり頭おげ

また頂低れて急ぎ行く)

兼松谷録

旅 咏 (二)

——松江紀行の歌——

河野翠漱

海の音又は今さく平原の聲の中にも君を忘れ

ず

國訛りをかしたれども美しくしき少女とゆきぬ

物おもはなく

あな數多長さ袖振り水いろの衣きて來る湖南

の女

(三)

(四)

少女せうじよみな眞王またまのごとし口々くちくに戀こひがたり行く神かみ
代よなる國くに

君きみに言いふかかめるめでたき國住くにぢみのよろこび分わて
俱ともに去いなまし

ふるさとの戀こひを乗をてよと北きたの海うみより蓬々ぼろろと風かぜ
われを吹ふく

船ふねに見みる青あおき磯曲いそまがに裳もをかゝげ何なにの貝かい探たづぬめ
し少女せうじよ

緋ひの袖そで

菅原紅雨

紅梅こうばいは静しづにうなだれ涙なみだしぬ思出おもひで多おほきゆふべの
雨あめに

はてしなき海うみに君抱きみだき千年せんねんも沈しづめる吾われを幸さいと
誰たがいふ

「この恨うらみみとはに忘われじ春來はるれど」落葉おちばにう
づむ花はなのささやき

(五)

すがれたる君きみが心のくらがりくらがりに花はなをもとむと

(六) さまよふは誰ぞ

忘れぬ彼の目わぞめの緋の袖に涙印せしう
らわかき人

木蓮に雨する夜なりほのぐらき燭に對してわ
れひそに泣く

かいまみぬ夜毎に君は青き壁傳ひて泣くを往
きつ返りつ

いと静に雪する夜半をとどろきぬ胸に疾風は
いく度となく

今日もまた君に捧げむ料にとて赤き木の實を
多にわれどる

あなうたて「時」なる海の彼方にはほのに見
ゆなりうたがひの國

君に似る鶴を來り静なるわが胸の湖に波たて
て行く

青き花愁に咲けり君去りて訪ふ人もなき胸の
荒野に

(七) なにとなき愁にまかれてむ春も知らで過ぐべ

(八)

き新しきもの

君吸ふと抱けばあなや黒髪を傳ひて射來ぬ白羽の征矢は

免しませ再び浮かぬ劫暗の淵と知りつつ君すてし罪

君すてしあさましわれも消息の絶ゆれば知らぬ淋しらに在り

大なる幸得しと否つひにわれ深く淪みぬ凶の淵

卓上詩話(二)

翠 激

陳い言草だが、歌は自己を欺いて出来るものでない。外形は成程、萬人共有の言語辞句に仮るものがあるとも、内容——思想は、何處までも自己専有のものであらねばならぬ。若し過つて、自己を欺き自己を離れて歌はれた者があるとすれば、それは何の生命もない、樹石と擇ばぬ死物だ、冷灰だ。どうしてそれが人を動かし得やう。

(九)

我等の望む所は、其片章隻句のうち、猶一道の、鮮かな血が通つて居ることだ、元氣な

(一〇一)

脈搏が響いて居ることだ。

■戀愛は、人間至微不至の働きである。我等は遂に、この活動と終始することを免れぬ。我等は我等の、眞の情を、この戀愛を通じて而して初めて窺ひ得る。

■これは人々が、いかに我等の歌に、戀愛の多いことを責めやうとも、我等は決して疚しとせぬ、自己を没し、自己を欺いてまでも、世間の風尚に投ずることは、我等の快とする所が無い。我等は今、青春の時代に在る。戀愛を措いて、我等生存の意義、果して何ものぞ。我等の感觸を通じて、映ずる総てのものは、悉く戀愛の影ならぬは無いのだ。

雪の日

素

影

午後になつてから俄に雪もよひの空どかはりやがてふわり／＼と白いものが降つて来る。

自分は、あすは日曜の心にかかる事もないから、この雪を眺めながら、心のままに詩作に耽らうと、火鉢を近く引きよせ、原稿用紙をのべ筆をとつた。雪を見つめてはまた原稿用紙を覗みつくらす。今日に限つて何だか氣がそは／＼して一つも歌が出来ない。そのうちに、風が出て、机の上、書物の上、はては頬や髪に雪片がひら／＼と散る。これでは

(一一)

(二一)

と障子を閉て切り、暫く苦吟してゐると。

「まあ、爺さん、ご苦勞であつたのう。ほんとうに年寄つてからこの寒いのに。二郎さん、お前神妙に手傳ひするのう。」

といふ聲がきこゆる。はつと耳を傾ける、今のは儘に宿のお婆さんの聲であつた。

「やれ、弱つた。こんなに八十あまりにもなつて、薪採りにまで行かねばならんとは何のめぐりあはせだらう。あゝ草臥れた、少し休ませてもらはう。二郎も、それを下して休めよ。」

といふのは、聞きなれぬ他所の爺さんの聲だ。自分は、急に障子を明けて見やつた。爺さん

(三二)

は、年は、八十の上を四つ五つ。腰は曲て海老のやう、やせこけて見るかげもない、体には、破れに破れ、汚れに汚れた着物をまとひ、上には、繩の帯を巻き附けてゐたが、やがて重さうに背負つゐて十本ばかりの薪を、石垣の頭におろし、鉢巻にして居つた黒い手拭をとり、二三べんはたいて額の汗を拭き始める。子供も、父のとならべて二三本ばかりの薪をおろした。

「俄に雪が降り出して、嘸寒いだらう。ねね火を焚いてあげるから、まあ少し温りな。」

と相變らずお婆さんは親切に言つてやる。

「有り難う。わしはちつとも寒くはない、二」

(四一)

「耶や、寒からう温あたたらしてもらへ。いや、ほんとに生き甲斐もないことよ。健全たつしやな子がありながら、こんなお年おとしやして毎日／＼食べ物たべものの世話から、薪かきの心配までせにやならんとは。」

と、そろ／＼述懐じゆわいをはじめ。

「さうよ／＼、太吉さんといふ健全たつしやな息子むすこがあるにのう。なにかね、この節ふしもちよつと前まへもお前まへさんを見てはわけんのかね。」

「なんのあなた、親おやを親おやとも思おもはぬ不孝ふこう者ものでわしが少しでも無心むしんらしいことを言いはうもさのなら、なんのかのつて、小僧こぞうげな事ことばかり言いやあがつて……せめて嬬はらが生いきて

(五一)

居いて呉くれたらといつても死しんだ娘むすめのことを思おもはぬことはありません。お、寒さむくなつて来たきた、少し温あたたらしてもらはう。」

と内うちへは入いつた。引ひきつゝいゝ爐いろりのはたで愚痴ぐちのありたけを溢こぼす様子ようすではあるが、よくはささどれん。また、強こひて聞きかうともしな。

それから、ものゝ二十分にじゅうぶんも経たつたころ。

「や、大分おほぶん温あたたつて来たきたぞ、そろ／＼歸かへるとせう。さようなら婆ばあさん、ありがたう。」

「まあ悠ゆくり温あたたつて歸かへるがよいに、さうかい、それでまた寄よつて休やすみなれ。」

といふ聲こゑがはつきりきこえた。僅わずかかばかりの營養えいよう不ふ良りやうで二人ふたりとも力ちからがない。僅わずかかばかりの

薪を負うて起たうとしては幾度か起ち損ねた
かどう／＼足を踏みしめた。そして杖を力に
歸りはじめた。風は一しきり強く吹き、雪は
用捨なく年よりと子どもとの頬を打つ。(完)

瓊

増野翅白

のみだらなる赤き唇
毒の酒あかでむさばるる
来獸の戀かなし相思の
果よるこびは永久にさざめけ
天上の玉のもたひに

▲寄贈新刊 △朝虹(四ノ三)△山鳩(同人號)△
ウキジロ(五ノ四)△藻の花(四ノ十)

▲社告 △表紙畫は、新詩社々友洋畫家荒木
芳男代の彩管に成れるものなり△森脇桃村氏
は、濱田支部幹事を辭せられしにより、小川
石櫻に全幹事を囑托することゝなれり。

▲投稿募集 △小説詩歌俳句譯文美文評論等
政事時事に涉らざる限りなるべく廣く、社友
及び大方諸君の玉作を募る。字詰行數等に制
限なし。用紙は必ず半紙全葉のこと。

▲次號原稿 〆切は四月十二日。

銀鈴 三册郵稅共拾參錢六册全前金貳拾五錢
廣告料 一行拾錢 一頁壹圓 半頁前金六拾錢

明治四十一年四月廿三日印刷
明治四十一年三月廿五日發行 (銀鈴第三十號)

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三一
發行兼編輯人 河野岩雄

島根縣飯石郡赤名村大字赤名八二一

印刷人 木村柳三郎
印刷所 赤名活版所

編輯所 石見國邑智郡 田所村下龜谷 銀鈴社編輯部

發行所 石見國邑智郡 田所村下田所 銀鈴社事業部

明治卅七年一月十四日第三種郵便物認可(每月一回廿五日發行)
明治四十一年四月廿五日發行